

藤島城跡

第6次発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-1994-745-01

1994

1994
745
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



094 - 745

ふじ しま じょう あと
藤島城跡
第6次発掘調査報告書

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景(西方上空から)

序

本書は財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、藤島城跡第6次の調査成果をまとめたものです。

藤島城跡は山形県の西部庄内平野中央部に位置する藤島町にあります。

藤島町管内には山形県農業試験場庄内支場や山形県立庄内農業高等学校等、農業経営を支える公設の機関が設置されており、広大な庄内平野を抱えた中核を担っております。

調査では、現存する土塁跡の周囲に一辺約90mの堀が巡ること、土塁の基底部から溝状構造や柱穴跡が検出され、築城以前の遺構があることなどが判明しました。また、出土遺物は、茶白・石鉢・石臼などの石製品や陶器・かわらけなど、当時広く使われていたものに混じって青磁・白磁・染付などの中国製のやきものが出土しており、当時の流通経済の一端をうかがい知ることができます。

埋蔵文化財は祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な遺産といえます。私たちは国民的財産の文化財を大切に保護し、さらに郷土の中で培われた文化を後世に引き継がねばなりません。一方、平和で豊かな暮らしは私たちが等しく切望しているところです。近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

事業区内の遺跡の調査は、埋蔵文化財と開発事業実施のため、適切かつ迅速に行われることが今日求められています。こうした要請に適切に対処するとともに埋蔵文化財調査体制の充実を図ることが急務とされ、平成5年4月に財団法人山形県埋蔵文化財センターが設立されました。職員一同、県民と関係各位の要望に応え本県の埋蔵文化財保護のため一層の努力をいたす所存です。今後とも当センター発足の目的が遂行されますようご支援ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

本書が文化財保護活動の啓蒙普及、学術研究、教育活動などにおいて皆様のご理解の一助ともなれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

1 本書は山形県教育委員会県立高等学校産業教育施設整備事業に係る「藤島城跡」第6次発掘調査報告書である。

2 調査は山形県教育庁文化課の調整を得て、教育庁総務課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　　藤島城跡（ASTKJ-6）遺跡番号1716

所在地　　山形県東田川郡藤島町大字古柳跡108-1

調査期間　発掘調査 平成5年4月1日～平成6年3月31日

現地調査 平成5年8月23日～平成5年10月20日延べ30日間

調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

発掘調査・資料整理担当者

調査研究課長　佐々木洋治

主任調査研究員　野尻　侃

嘱託職員　川田　嘉信

4 発掘調査及び本書を作成するに当たり、山形県教育庁総務課、山形県土木部建築課、庄内支庁建設部建築課、山形県立庄内農業高等学校の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、野尻　侃、川田嘉信が担当した。編集は安部　実、伊藤邦弘が担当し、全体については佐々木洋治が監修した。

6 遺構平面図については、株式会社シン技術コンサルに実測委託した。

7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。

SE 井戸跡 SD 堀跡・溝跡 SK 土壙 EB 柱穴
RP 完形・一括土器 RS 石製品 RM 金属製品 RW 木製品

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を指す。

(2) グリッドの南北軸は、N-35°-Eを測る。

(3) 遺構実測図は1/40、遺物実測図は1/4、1/8縮図で採録し、各捕図毎にスケールを付けた。また、遺物実測図中のスクリーントーンは塗り部分を示す。

(4) 本文中の遺物番号は、実測・観察表・図版とも共通とした。

(5) 遺物観察表中（ ）内数値は、図上復元による推計値、または残存値を示している。出土地点欄の層位では、Fは遺構覆土内出土、ローマ数字Iは遺跡を覆う土層（基本層序）を表している。

目 次

序	
巻頭カラー写真	
例言	
I 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の立地	1
2 歴史的環境	1
II 調査の経緯	
1 調査に至る経過	2
2 調査の経過	2
III 検出された遺構	
1 遺構の分布	4
2 堀跡・土壙	4
3 溝跡	4
4 井戸跡	6
5 土壙	6
IV 出土した遺物	
1 遺物の分布	8
2 須恵器・赤焼土器	8
3 かわらけ	8
4 陶器	8
5 磁器	15
6 石製品・木製品	16
V 調査のまとめ	
報告書抄録	

挿 図

第1図 遺跡概要図	1
第2図 遺跡位置図	3
第3図 遺跡の層序	3
第4図 遺構配置図	5
第5図 S E24井戸跡	6
第6図 S K23・61・73・80・81・84・101土壙	7
第7図 須恵器・中世陶器	9
第8図 中世陶器・かわらけ・近世陶器	10
第9図 染付・青磁・白磁・石製品	12
第10図 石製品・木製品	14

図 版

図版1 A区遺構検出状況 C区遺構検出状況	
図版2 B区遺構検出状況 B区調査風景	
図版3 S E24井戸跡	
図版4 遺跡の層序(C区東壁) 土壙基底部層序	
図版5 S D・S K完掘状況・遺物出土状況	
図版6 出土遺物(1)	
図版7 出土遺物(2)	
図版8 出土遺物(3)	
図版9 出土遺物(4)	
図版10 出土遺物(5)	
図版11 出土遺物(6)	

付 表

表1 調査工程表	2
表2 藤島城変遷年表	2
表3 出土遺物観察表(1)	11
表4 出土遺物観察表(2)	13
表5 出土遺物観察表(3)	15

I 遺跡の立地と環境

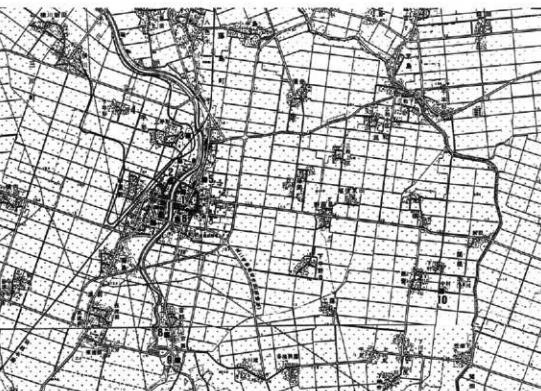
1 遺跡の立地

藤島城跡は、庄内平野のほぼ中央に位置する山形県東田川郡藤島町古橋跡108-1他に所在する。町の南東部には出羽三山の羽黒山、月山が遠望し、月山を源とする藤島川は肥沃な耕地をもたらしている。

藤島川は町内を大きく蛇行し、その両岸は上流で河岸段丘、中流から下流にかけては自然堤防が形成されている。中流から下流では、河川によってもたらされた肥沃な水田地帯を作り、優良な米作農業で町を発展させている。本遺跡は藤島川の河岸段丘の右岸に立地し、標高は12mを測る。

2 歴史的環境

藤島町内には、49カ所の遺跡が確認され山形県遺跡台帳に登録されている。その内訳は、縄文時代11カ所、弥生時代1カ所、古墳時代1カ所、平安時代22カ所、鎌倉時代3カ所、室町時代9カ所、江戸時代2カ所である。町の北西部に所在する平形遺跡は平安時代の集落跡として昭和52・53年度と調査が実施され、10世紀代の集落を形成していた成果が報告されている。また、藤島川の自然堤防上には、第1図に示した中世から近世にかけての城館跡が、数多く確認されている。



第1図 遺跡位置図 (S = 1 : 50,000)

II 調査の経緯

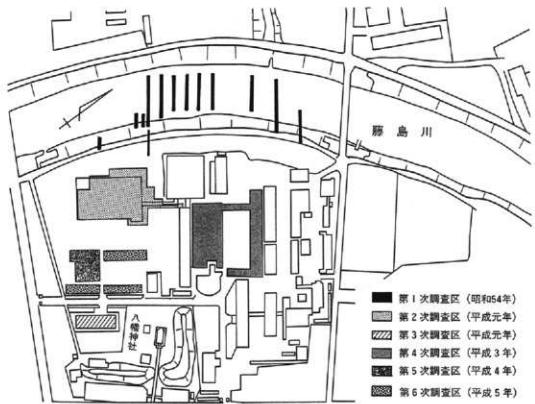
1 調査に至る経過

庄内平野のほぼ中心部に位置する藤島町は、米や柿等の農産物供給基地として発展している。また、町の中心には庄内地方の農業従事者を育成する、山形県立庄内農業高等学校が所在し、学校は町の基盤となった藤島城跡の城内に在り、庄内地方の農業を支えている。

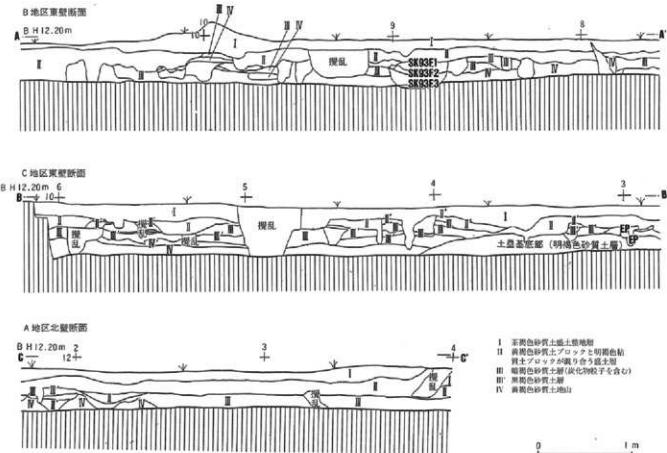
平成元年度からは山形県教育委員会が県立高等学校の産業教育の一貫として、施設整備の強化を計り、これまで体育馆、校舎改築、ガラス温室等の整備事業が実施され第1次から第5次にかけて調査が行われた。調査の成果からは、約90m四方に巡る跡跡を有する内郭や、外郭には大型の建物跡が検出されている。平成5年度はさらにガラス温室の建設が計画され、事業実施課である県教育庁総務課と協議を重ね、温室部分に限り緊急発掘調査を実施することで合意を得た。調査は財団法人山形県埋蔵文化財センターが行った。

2 調査の経過

発掘調査は平成5年8月23日から同10月20日までの延べ36日間を第6次発掘調査として実施した。調査は、調査では第5次調査区起点を踏襲し、5m単位のグリッドを建設予定地の範囲に設定した。以下に調査の経過を略述する。



第2図 遺跡概要図(S=1:3,000)



第3図 遺跡の層序図(S=1:40)

表1 藤島城跡調査工程表

	8月	9月	10月
現地			
作業	機材搬入・環境整備 グリッド設定・トレンチ調査 表土除去(重機) 手掘り・面削り 遺構検出(精査) 記録(写真撮影等) 写真測量		
備考			
		取扱式調査開始	
			発掘規定期間明確化会議

表2 藤島城遷延年表

元号	西暦	ことがら	紀元	西暦	ことがら	紀元
不詳		藤島城が築かれる 詳記不明		天正16 1588	最高光栄 藩祖秀吉より庄内御を認められる	
興元 2	1341	鎌倉幕府 梶原清時が都司に任命される	黒	天正18 1590	秀吉上洛(三日町御殿、朝日町の対岸)を命じて、城を築く	上
興元 3	1342	北朝方の佐竹義綱により藤島城を築く 東光宗	黒	天正18.8月1590	大規模な工事で、費用は3,000石に及ぶ	上
正平11	1356	北島勝頼にて長を擧げる 南朝方の拠点となる	氏	天正19 1591	藤島城に石垣丸を築く工事に際して、城主が死んで、代官が就き、城主が就きざる	氏
正平12	1357	佐竹輝政 藤島城を攻める	黒	元禄 5 1692	越後守源氏の攻めで、城主が死んで、代官が就き、城主が就きざる	黒
文安 2	1445	土佐林原守・信光・信房・山内時綱・三好山元・足利義満等を招む	黒	元禄 6 1693	越後守源氏の攻めで、城主が死んで、代官が就き、城主が就きざる	黒
元龟元	1570	武藤信溌・藤原 大宝寺(貞氏)と争いに敗れる	氏	元禄 12 1699	新潟守城守藤島源に城を譲る「因縁裏」に賛否	上
天文 7	1579	武藤信溌・藤原 大宝寺(貞氏)と争いに敗れる	氏	元和元 1615	徳川將軍の「一國一城令」により藤島城は解体	氏
天正15	1587	最高光栄 庄内に征討する尾崎城主藤島義連	氏		資料 藤島城跡第2次発掘調査報告書より	

- 8月23日～27日 機材搬入 調査時の安全祈願 調査範囲の安全対策設置設置 調査区
設定作業 重機導入による表土除去 その他環境整備
- 8月30日～9月2日 重機導入後の面整理 事業実施区域を3区に分けA区(草花温室)、B区(野菜温室)、C区(養液温室)と呼称 遺構検出作業
- 9月6日～10日 各区面整理 調査区の壁面整理及び順序確認 確認遺構マーキング
断面図測定作業 C区で内郭土塁の基盤層確認
- 9月13日～17日 面整理による遺構確認作業 SD1堀跡掘り下げ B区遺構掘り下げ
- 9月20日～30日 各区遺構掘り下げ 遺構断面図測定作業 写真撮影
- 10月4日～8日 遺構断面図 SD1堀跡掘り下げ終了断面観察 SE井戸跡・SK土壌精査作業 写真撮影
- 10月12日～20日 各区精査作業 中世陶器(越前・珠洲焼系)及び青磁出土 遺構掘り
下げ完了 断面図記作業 完掘写真を撮影し、19日には調査成果を
公表する説明会を開催し、20日に機材を撤収、調査を終了した。

III 検出された遺構

1 遺構の分布

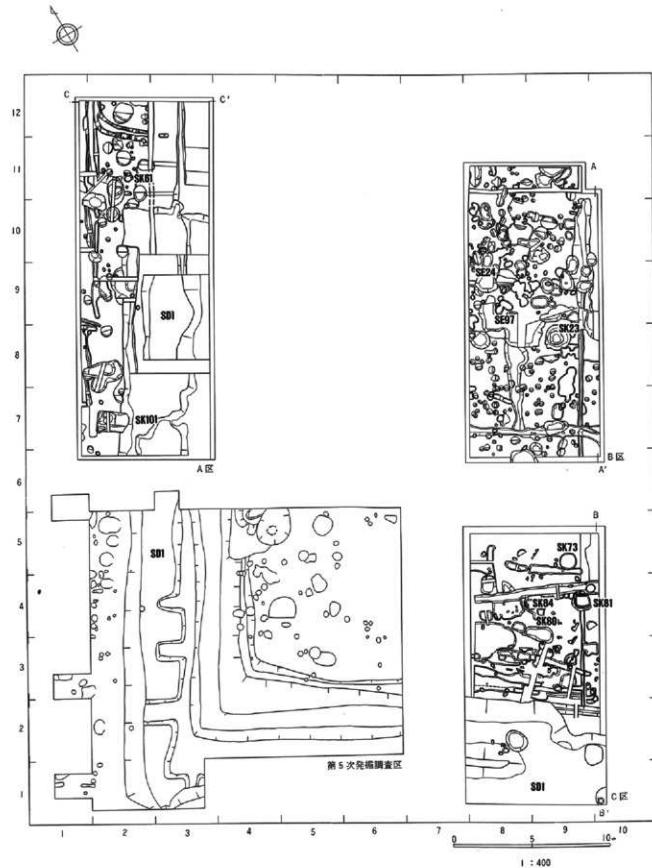
藤島城跡は、元和元年(1615)の一国一城令により廃城になったが、建久4年(1193)に土佐林右京守正が城主として記録に表れたのが最初である。廃城になるまで戦国期の推進を得てきた。第1次から今次調査までの結果からは、幾多の築堀が平面・断面や、遺物の観察から推測できる。今次は、内郭南西部の一部を調査した。温室棟という狭い範囲での調査で在ることや、遺構の重複が著しく、柱穴による建物跡の組み合わせが確認できなかったが、内郭という性格から遺構の検出は密に確認できた。検出遺構は堀跡、井戸跡、土壤、溝跡、柱穴等である。以下に記述する。

2 堀跡・土塁(第4図、図版1)

堀跡はA区とC区で確認された。第5次調査で堀跡の南西角が調査されており、SD1堀跡と命名され、それに続く西辺の堀跡がA区で、南辺がC区で確認されている。第4図に5次調査と本次調査を合わせた平面図を載せたが、その図からは南西隅の角からA区の西辺で45m部分で大きく内郭へ膨らみ、C区の南辺では25m部分で堀内へ膨らむ状況を得ている。このことはA・C区での虎口と考えられる。確認面からの深さは1.8mを測り、中世陶器・染付・青磁・白・摺鉢等の遺物が出土した。土塁はC区東壁の断面で確認できた(図版4)。土塁は底面部の一部が厚さ8～16cmに認められ、内郭を囲むものと考える。

3 溝跡(第4図、図版5)

調査で確認できた溝跡は、6条である。ほとんどが建物跡の雨落溝と考えられるが、SD21溝跡は内郭内部を区画する溝跡と考える。幅40～50cm深さ55cmを測り、覆土からは第8図39の珠洲系陶器の薄片が出土した。



第4図 遺構配置図(S = 1:400)

4 井戸跡

S E24井戸跡（第5図、図版3）

B区中央西壁ぎわで

確認され、井戸掘り方は円形で、中位で隅丸方形を呈している。規模は確認面で径140cm、深さ95cmを測る。井戸底面には一辺4cmの角材による井戸横桟が四方に組み込まれ、四面には縦板と思われる面が観察されているが、廃絶の際、抜き取られたものと考えられる。

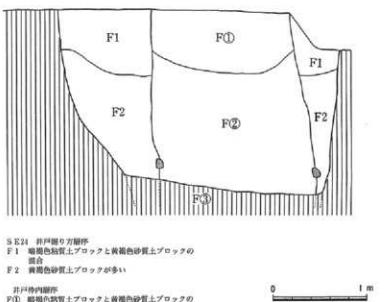
覆土は大きく堀り方と井戸枠内が2層に分かれ、上層の覆土は黄褐色砂質の地山層ブロックが密に埋め込まれ、廃絶時に一気に埋められたものと考える。堀り方覆土2層からは越前焼の片手が出土した。

5 土壌（第6図、図版5）

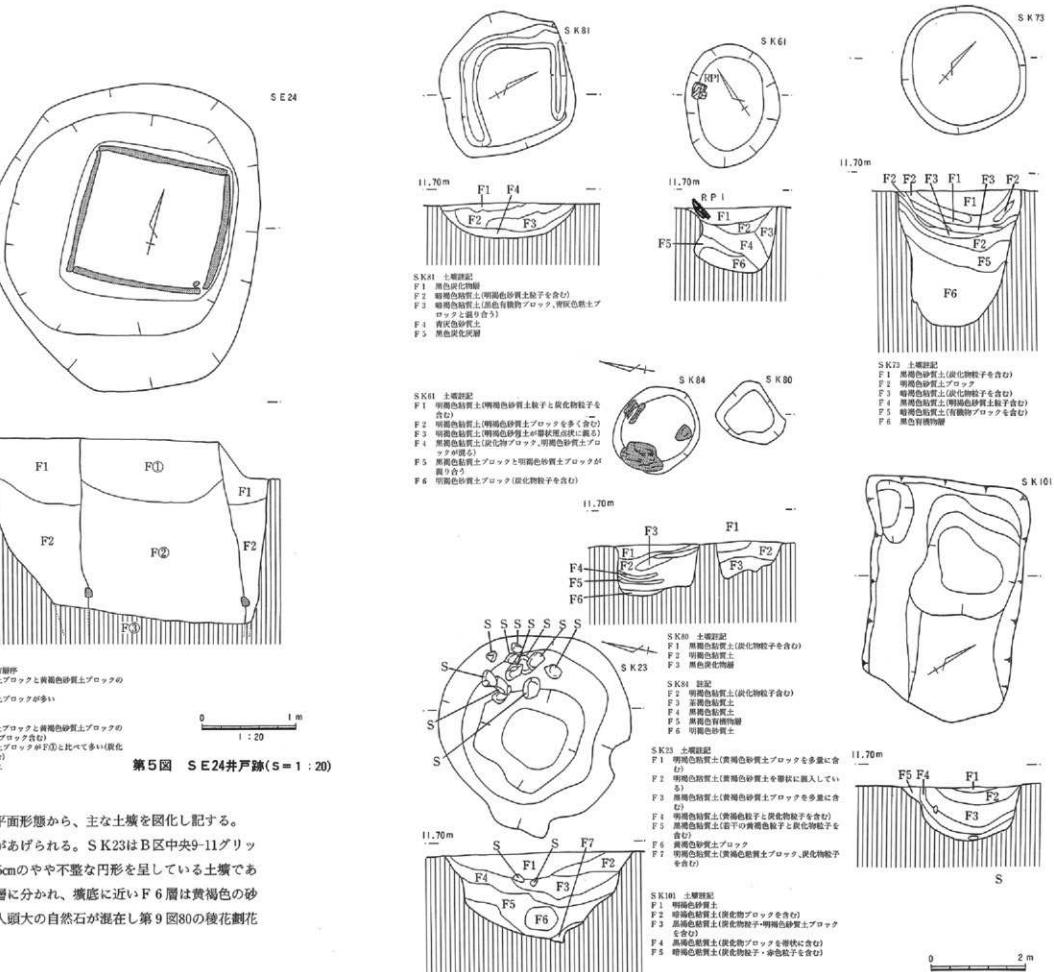
土壌は51基を登録した。平面形や断面形の形状でいくつかの形態に分けることができる。

ここでは、円形、橢円形、不整形を呈する平面形態から、主な土壌を図化し記述する。

確認面が円形となるS K23・73・84土壌等があげられる。S K23はB区中央9-11グリッド第3層上面で確認された径約100cm、深さ45cmのやや不整な円形を呈している土壌である。断面形はやや掘り鉢状を呈し、覆土は7層に分かれ、底面に近いF6層は黄褐色の砂質土がブロック状に混入している。覆土には人頭大の自然石が混在し第9図80の後花割花



第5図 S E24井戸跡(S=1:20)



第6図 S K23.61.73.80.84.101土壌(S=1:40)

文を施す青磁が出土している。SK73はU字形、SK84は台形を呈し、有機質の覆土が交互に帯状に入り込んでいる。覆土からは木製品が出土している。楕円形をしたSK61はや袋状となり、複雑な覆土を呈している。一気に埋め込まれた感がする。確認面上部からは、珠洲焼系の陶器が出土している。不整方形をしたSK101土壙は底面が複雑であるが、覆土は自然に堆積している。覆土からの遺物の出土は見られなかった。

IV 出土した遺物

1 遺物の分布

調査で出土した遺物は整理箱にして総数5箱である。ほとんどが陶器であるが、そのほかには瓦器・石臼・石鉢・蒼串・木製品・漆器等である。これらは調査区内のほとんどどの区域で出土するが、特にB区からの出土が多い。このことはB区が内郭の範囲になることや、学校通学路に近いことから比較的ほかの調査区と比して攪乱が少ないとによるものと考える。C区は、調査区の南部が断面にかかるが他は内郭内である。しかし、遺物の出土量はB区ほどでもなく少ない量である。このことは第3章2節で記述した土壙の存在が確認されていることによると考える。ここでは、出土した遺物を種別毎に図化し記述する。

2 須恵器・赤焼土器(第7・8図、図版6)

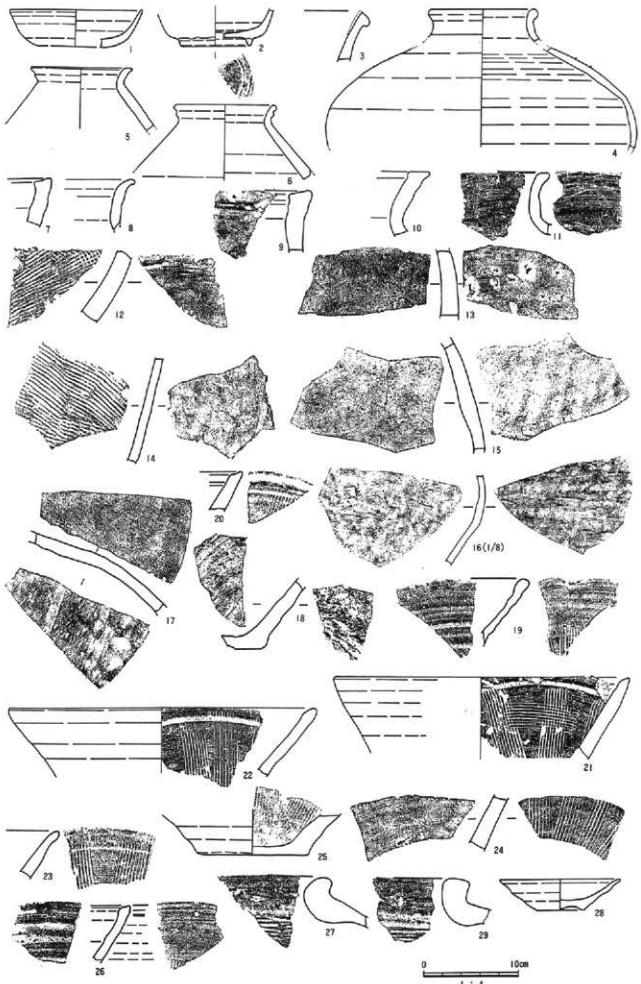
須恵器は3点が図化できた。1～3である。1は環で底部からやや丸みをもって口縁部へ立ち上がり、器面には明瞭にロクロ痕を残す。器内は厚く口唇はやや外反する。SK49土壙の床面からの出土である。2は高台付である。1/4程の破片で底部に高台をもち、底部から口唇にかけて急速に立ち上がるが口唇部が欠落している。底面の切り離しは回転糸切りでSK96土壙の覆土からの出土である。3は縦の口縁である。外半し、口唇で縁をもち、SD1壙跡覆土からの出土である。2・3は流れ込みの可能性が強い。赤焼き土器は51・53である。底部のみの破片で回転糸切りによる切離し痕がのこる。

3 かわらけ(第8図、図版7)

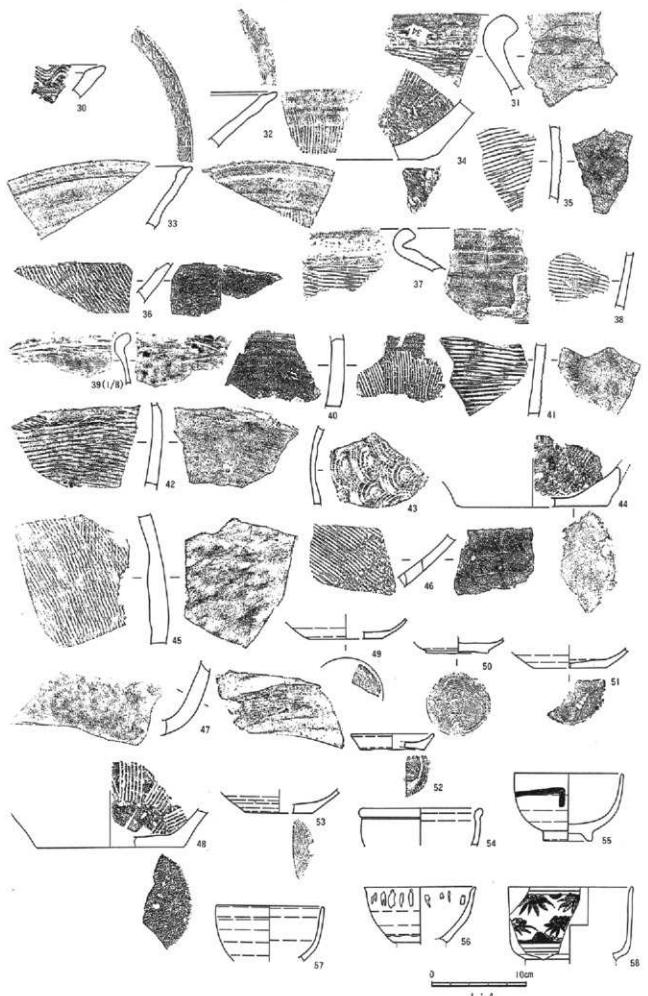
かわらけは、49・50・52である。成形はいずれもロクロを使用しており、回転糸切り、体部はロクロナデがみられる。52は小形で身が浅いタイプである。

4 陶器(第7・8図、図版6・7)

陶器には珠洲焼系陶器と、越前焼系陶器、美濃瀬戸系陶器、肥前系陶器が出土している。量的には珠洲系が多く出土し、次いで越前焼系である。美濃瀬戸系や近世陶器となる肥前系の陶器は数点である。19・26・27・29～42・44～46は珠洲系陶器である。器種には甕・壺・壺鉢等である。甕の体外部外面には2から3cmで4ないし5本の粗いタクキ目が施され、内面には指ナデと楕円形の押圧痕が認められる。壺鉢(26・30・32・34・40・44)は8～10条の御印が施され、口縁端面に櫛描波状文が施されるものがある(30)。越前系の陶器には甕・壺・壺鉢・四耳壺の器種がある(4～18・20～25)。4は頸部と胴部で、一個体となるものと思われる四耳壺で、頸部は外反し、端部を玉縁状に丸く折り返す口縁である。両者内外

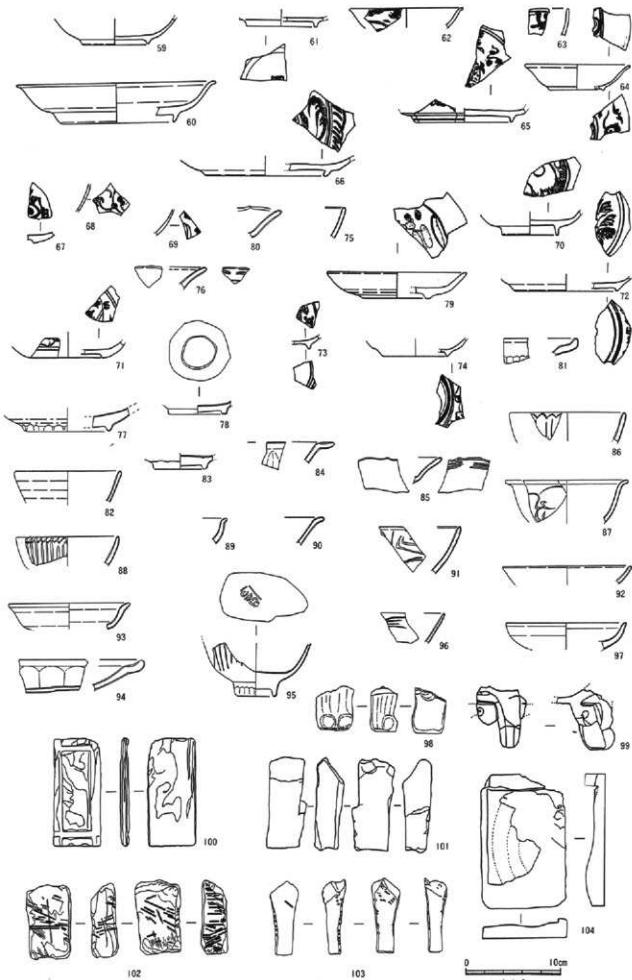


第7図 出土遺物実測図(1)



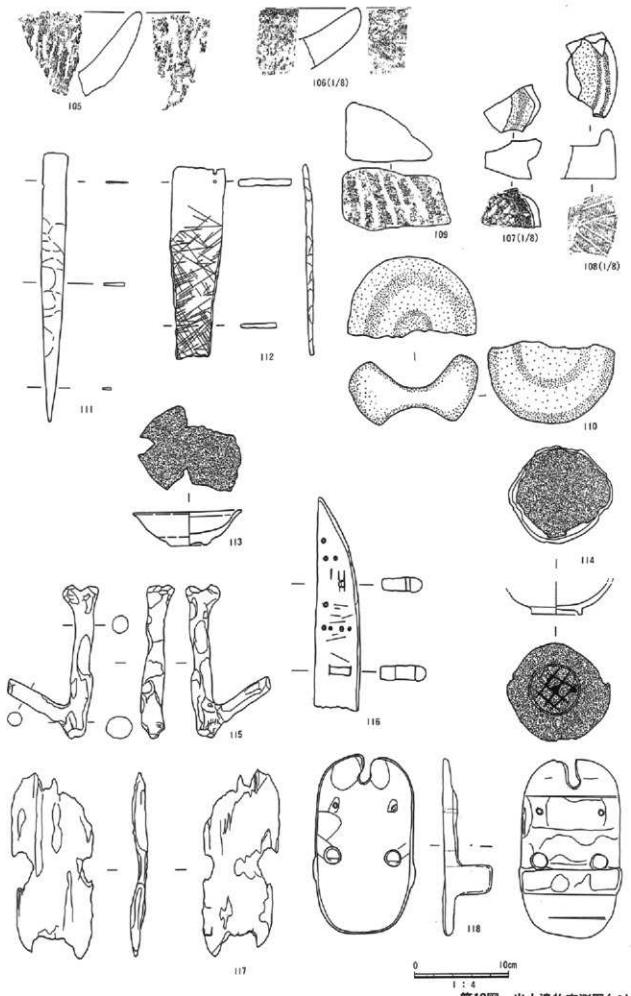
第8図 出土遺物実測図(2)

- 10 -



第9図 出土遺物実測図(3)

- 11 -



- 12 -

表3 出土遺物観察表(1)

()内数値は現存値、及び推測値

番 号	種 類	器 種	計 測 値 (mm)			胎 土	色 調	調整接法・特徴	出土地点
			口 径	底 径	高				
1	箱 型	坏	(142)	(80)	(38)	粗砂混	灰 Hve 10YR-6	クロコ痕、回転ヘラ切り	SK49Y
2		高台付坏	—	(76)	(38)	粗砂混	灰 Hve N-6		SK96F
3		甕	—	—	(56)	緻 密	灰白 Hve N-7		SD 1 F
4		四耳甕	(117)	—	(146)	緻 密	灰白 Hve 5Y-7		SK21F1
5		甕	(110)	—	(66)	緻 密	灰白 Hve 5Y-7	表自然釉	SK51F
6		甕	(109)	—	(78)	緻 密	灰白 Hve 5Y-7	表自然釉	SK51F
7		甕	—	—	(50)	緻 密	灰 Hve 5Y-6	方角口縁?	SK51F
8		甕	—	—	(53)	粗砂混	灰白 Hve 7.5YR-7		SD 1 F 2
9		甕	—	—	(63)	粗砂混	灰 Hve 7.5Y-6	方角口縁	SD 1 F 5
10		甕	—	—	(69)	緻 密	灰 Hve 7.5Y-7		11- 8 III
11		甕	—	—	(65)	粗砂混	灰 Hve 7.5Y-6		SD 1 F 1
12		甕	—	—	(72)	粗砂混	灰白 Hve 2.5Y-6		9- 9 III
13		甕	—	—	(68)	粗砂混	灰 Hve 7.5Y-6	内面自然釉	SD75F
14		甕	—	—	(111)	緻 密	灰 Hve 7.5Y-6		8- 8 III
15		甕	—	—	(116)	緻 密	灰白 Hve N-7		SK78F 3
16		大甕	—	—	(185)	緻 密	灰 Hve 5Y-6		SK61F 1 RP1
17		甕	—	—	(144)	緻 密	灰 Hve N-6		SD74F
18		甕	—	—	(72)	粗砂混	灰白 Hve 5Y-6	表 自然釉	(TS80) SE24F2
19	珠潤焼	甕	—	—	(53)	粗砂混	灰 Hve N-5		ED121F
20		溜鉢	—	—	(42)	粗砂混	灰白 Hve SYR-7		SD 1 F
21		溜鉢	(315)	—	(85)	粗砂混	灰 Hve 5Y-5	腹 10条の横目 側 9条の横目	SD21F
22		溜鉢	(330)	—	(72)	粗砂混	灰白 Hve 5YR-7	9条の横目	SK 1 F 1
23		溜鉢	—	—	(50)	粗砂混	灰白 Hve 2.5YR-5	10条以上の横目	SD 1 F
24		溜鉢	—	—	(49)	粗砂混	灰 Hve 5Y-5	8条の横目	SK33F
25	透潤燒	溜鉢	—	(115)	(44)	粗砂混	灰 Hve 5Y-6	10条の横目	SK80F
26	珠潤燒	溜鉢	—	—	(58)	粗砂混	灰 Hve N-4		SK103F
27	要	溜鉢	—	—	(49)	粗砂混	灰 Hve N-5	玉縁	SD 1 F
28	珠潤燒	溜鉢	(128)	50	33	緻 密	灰 Hve 5Y-5	透明感へ転用	SD 1 F
29	珠潤燒	甕	—	—	(51)	粗砂混	灰 Hve N-6	玉縁	SD 1 F 1
30	珠潤燒	溜鉢	—	—	(33)	粗砂混	暗褐色 Hve 7.5GY-3	青海波文口縁	SD 1 F
31	珠潤燒	甕	—	—	(80)	粗砂混	灰 Hve 5Y-5		EP116F
32		溜鉢	—	—	(56)	緻 密	灰オーブ Hve 5Y-6	9条 1単位横目	SD119F
33		溜鉢	—	—	(65)	粗砂混	灰 Hve 7.5Y-4		SR103F
34	珠潤燒	溜鉢	—	—	(61)	粗砂混	灰 Hve 7.5Y-5	8条の横目	SD 1 F 1
35	珠潤燒	甕	—	—	(58)	粗砂混	灰 Hve 2.5Y-7		11-10II
36	珠潤燒	甕	—	—	(39)	緻 密	暗褐色 Hve 2.5Y-5		SK103F
37	珠潤燒	甕	—	—	(44)	粗砂混	灰白 Hve MYR-6		12- 3 II
38	珠潤燒	甕	—	—	(55)	粗砂混	灰 Hve 7.5Y-5		SK51F
39	珠潤燒	溜鉢	—	—	(107)	粗砂混	灰 Hve 7.5Y-5		SD21F
40		溜鉢	—	—	(59)	粗砂混	灰 Hve 5Y-5	11条の横目	SD1-F1
41	珠潤燒	甕	—	—	(73)	粗砂混	灰白 Hve MYR-6		8- 10II
42	珠潤燒	甕	—	—	(66)	粗砂混	暗褐色 Hve MYR-6		8- 8 III
43	珠潤燒	溜鉢	—	—	(81)	緻 密	暗褐色 Hve 5GY-3		SD 1 F
44	珠潤燒	溜鉢	—	—	(152)	粗砂混	暗褐色 Hve 2.5GY-4		SD 1 F
45	珠潤燒	甕	—	—	(136)	緻 密	灰 Hve 10Y-4		SD106F

第10図 出土遺物実測図(4)

表4 出土遺物観察表(2)

押 番 号	種 類	器 種	計測値(mm)			胎 土	色 調	調整技法・特徴	出土地点
			口 径	底 径	器 高				
第 8 回	46	燒 甕	—	—	(50)	緻密	灰 Hve N-2		SD 1 F
	47	瓦 器	—	—	(83)	粗砂混	灰 Hve N-6		SX125F2
	48	攢 鉢	—	—	(154)	粗砂混	灰白 Hve 3Y-8	7条の摺目	SD 1 F 4
	49	皿	—	(77)	(19)	緻密	灰白 Hve 3WY-8		SD 1 F
	50	皿	—	64	(14)	緻密	淡黄灰 Hve 10YR-8		SD121F
	51	非焼 土器	环	—	(80)	(20)	緻密	淡黄灰 Hve 10YR-8	回転糸切り
	52	なげ 皿	(88)	(68)	16	粗砂混	淡黄灰 Hve 10YR-8		SD 1 F
	53	非焼 土器	环	—	(72)	(25)	緻密	にふくらむ 淡黄灰 Hve 10YR-6	回転糸切り
	54	越前桃	小甕	(128)	—	(38)	緻密	にふくらむ 淡黄灰 Hve 7.5YR-5	SD 1 F
	55	碗	(116)	52	72	緻密	にふくらむ 淡黄灰 Hve 10YR-7	CIX II	
第 9 回	56	唐津桃	碗	(119)	—	(59)	緻密	蘭青 Hve 10YR-5	黒釉天目茶碗
	57	美濃燒	碗	(112)	—	(59)	緻密	灰 Hve 5Y-6	黒天目茶碗 茶軸
	58	肥前 窯	垂洗い	(132)	—	(80)	緻密	灰白 Hve 5Y-8	染付、筆文
	59	白 磁	皿	—	(70)	(28)	緻密	灰白 Hve N-8	SP21F
	60	青白磁	皿	(213)	(116)	(41)	緻密	灰白 Hve N-8	SD82-F
	61	高台内	—	(76)	(10)	緻密	灰白 Hve N-8		SD 1 P
	62	染付	端反碗	(120)	—	(20)	緻密	灰白 Hve 10Y-8	SD1-F1
	63	碗	—	—	(29)	緻密	灰白 Hve N-8		SDF 1
	64	染付 (草花)	皿	(112)	(58)	27	緻密	灰白 Hve 10Y-8	6-8 II
	65	染 付	皿	—	(102)	(15)	緻密	灰白 Hve 10Y-7	内部 露胎 玉致繩子 草花唐草文
第 10 回	66	染 付	大皿	—	(128)	(20)	緻密	灰白 Hve N-8	SD1F1
	67	碗	—	—	(11)	緻密	黄色 Hve 2.5Y-8		SD21F
	68	磁	碗	—	—	(26)	緻密	灰白 Hve 2.5Y-8	表 花唐草文
	69	碗	—	—	(26)	緻密	灰白 Hve 5Y-8		SK73F
	70	碗	—	—	(60)	(25)	緻密	灰白 Hve 5Y-8	13-3 II
	71	染 付	碗	—	(84)	(17)	緻密	淡黄灰 Hve 10YR-8	漆接着
	72	青 花	碗	—	(107)	(15)	緻密	灰白 Hve 7.5Y-8	EP?
	73	青 花	皿	—	—	(14)	緻密	灰白 Hve 2.5GY-8	SD21F
	74	碗	—	—	(68)	(18)	緻密	灰白 Hve 5Y-8	SD1-F1
	75	青磁	碗	—	—	(33)	緻密	灰 Hve N-5	EP126F
第 11 回	76	ノ	皿	—	—	(23)	緻密	オーリーブ灰 Hve 2.5GY-8	穀花割花文
	77	ノ	碗	—	(87)	(25)	緻密	灰青 Hve 2.5Y-6	2次火熱 高台内柱頭
	78	ノ	碗	—	(57)	(14)	緻密	灰 Hve 5Y-6	見込 猫かまとり痕
	79	染付	皿	(148)	(72)	28	緻密	灰白 Hve 5Y-8	SK-78F1
	80	青 花	皿	—	—	(40)	緻密	灰 Hve 5Y-6	SD1-F1
	81	青 花	盤	—	—	(18)	緻密	灰白 Hve 7.5Y-8	内部露井文
	82	青 花	碗	(110)	—	(33)	緻密	灰 Hve 7.5Y-8	SD 1 F
	83	青 花	碗	—	57	(15)	緻密	灰白 Hve 5Y-7	SD21F
	84	青 花	皿	—	—	(28)	緻密	灰白 Hve 5Y-8	露井文
	85	青 花	皿	—	—	(27)	緻密	灰 Hve 10Y-5	6-9 III
第 12 回	86	青 花	碗	(122)	—	(31)	緻密	灰 Hve 5Y-5	後花割花文
	87	青 花	碗	(130)	—	(45)	緻密	灰白 Hve 5Y-8	3-9 II
	88	青 花	碗	(108)	—	(31)	緻密	淡黄灰 Hve 2.5Y-7	外腹面切切り
	89	青 花	碗	—	—	(27)	緻密	灰白 Hve N-8	露井文
	90	青 花	碗	—	—	(29)	緻密	灰白 Hve 7.5Y-7	8-10 III

() 内数値は現存数値、及び推測数値

表5 出土遺物観察表(3)

押 番 号	種 類	器 種	計測値(mm)			胎 土	色 調	調整技法・特徴	出土地点
			口 径	底 径	器 高				
第 9 回	91	青磁	碗	—	—	(49)	緻密	灰白 Hve 5Y-7	雷文帝蓮弁文
	92	ノ	碗	(137)	—	(20)	緻密	灰白 Hve 5Y-7	SD 1 F
	93	ノ	碗	(130)	—	(27)	緻密	灰白 Hve 2.5GY-8	SD21F
	94	ノ	盤	—	—	(32)	緻密	灰白 Hve 10Y-8	内面 鎏文
	95	ノ	碗	—	40	(58)	緻密	灰白 Hve 5Y-7	SD 1 F
	96	ノ	碗	—	—	(36)	緻密	灰白 Hve 5Y-7	3-9 III
	97	ノ	碗	(128)	—	(29)	緻密	灰白 Hve N-8	SD21F
	98	赤焼	足	—	(28)	(46)	粗紗混	灰 Hve 2.5YR-7	SD 1 F 1
	99	瓦器	足	—	(20)	(61)	緻密	淡黄 Hve 5YR-8	SD 1 F 1
	100	本製品	—	長さ (114)	巾 (50)	厚さ (9)	—	—	SK72F
第 10 回	101	磁石	—	(97)	(40)	(30)	—	—	EP93F
	102	磁石	—	(80)	(49)	(29)	—	—	SD75F
	103	磁石	—	(80)	(30)	(26)	—	—	EP31F
	104	觀	—	(142)	(90)	(20)	—	—	11-8 III
	105	石鉢	—	—	(102)	—	—	—	SD 1 F
第 11 回	106	石鉢	—	—	(114)	—	—	—	SD30F
	107	石臼	—	—	(86)	—	—	—	SE79F
	108	石臼	—	—	(105)	—	—	—	SD21F
	109	晶	石臼	—	—	(62)	—	—	SD 1 F
	110	石臼	137	80	67	—	—	—	SK79F
第 12 回	111	木 製品	蓋	長さ (285)	巾 (26)	厚さ (3)	—	—	SK72F
	112	唐津焼	皿	118	43	35	緻密	明治期 Hve 2.5YR-5	舞明治伝用
	113	油ぬり碗	—	—	55	(31)	—	—	SD 1 F 5
第 13 回	114	木 自在鉤	鉤	162	90	28	—	—	SK73
	115	桶底板	(225)	(48)	(16)	—	—	—	SK73F
	116	製 品	下歎	(195)	(86)	(14)	—	—	SK76Y
	117	品	下歎	190	105	52	—	—	SK73F
	118	—	—	—	—	—	—	—	—

() 内数値は現存数値、及び推測数値

面とも單綠色の自然釉が付着している。S K21土壤からの出土である。他には8・11の口縁部がある。20~25は擂鉢である。10条の卸目を施し、直線的な卸目である。7・9・10・12~18は甕である。口縁形態(7・9・10)の觀察からは、頸部が肥厚し、端面は偏平で外側に引き出されるものと思われる。美濃瀬戸系の陶器は2点(28-113)提示できた。共に皿で、緻密な胎土で、灯明皿への転用が認められた。朝鮮系陶器の可能性がある。57は鉄釉が施された黒天目茶碗である。いずれもSD 1堀跡からの出土である。近世陶器(54・55・57)はSD 1堀跡上部の覆土から出土しており、後世の流れ込みと考える。

5 磁器(第9図、巻頭図版2、図版8~10)

磁器には白磁、青磁、染付、近世磁器が出土した。点数では白磁2点、青磁22点、青白磁1点、染付13点、近世磁器7点である。圧倒的に青磁の出土量が多い。白磁(59・60)は同系のものと考える。疊付の露胎である。緩やかに内側に小縁部が外反するものと思われる。青磁(75~78・80~97)の器種は皿・碗・盤である。施文には無文・蓮弁文・雷文帯連弁文が見られる。無文碗は体部が内側に、そのまま口縁にいたるもの(82・92)、口縁部が外反するものの(89・90・93・97)が見られる。蓮弁文は84は大振りな蓮弁文が縦刻により描かれ、単位文となる。94は幅広な蓮弁が連続する。91は雷文帯蓮弁文と考るが小破片のため主文様の觀察は困難である。86・88・95は口縁部の連続する弧線から引いた直線で蓮弁を現したものである先端部は劍先状になる。85は稜花割花文皿で外反し輪花をなす口縁部である。61は青白磁である。底部見込みに「福」字が描かれるものと思われる。

染付(65~67・69~74・79)には、皿・碗・盤・杯がみられる。花文を施すものが主で、65は内面底部に玉取り擗子、外面に牡丹唐草文が描かれるものである。66は内底に花文を有するものと思われる。98・99は瓦器で、風炉の猫足である。第2次調査で同一のものが出土している。猫足は二様の形態を要し、風炉の形態の違いが認められる。

6 石製品・木製品

石製品では硯(100・104)・砥石(101~103)・石鉢(105・106・110)・臼(107~109)が出土している。硯は2点の出土でよく使い込まれ中央部がくぼんでいる。砥石は3点で細かい擦痕が認められ、仕上げ砥と考える。石鉢は外面は粗いノミ痕、内面が細かいノミ痕である。臼は3点が認められ、上臼で受口が立上がる。

木製品では斎車(111)、漆塗椀(114)、鈎(115)、桶板(116)、下駄(117・118)である。斎車は上端が方形で下端にかけて尖らしている。文字等の痕跡は認められない。漆塗椀は外表面とも黒漆で、底部外表面見込みには赤漆による格子状の線が引かれている。鈎はL字状となる自然木を利用したもので自在鉤と思われる。桶板には桜皮による補修が認められる。下駄は円みをもった大きなもので上歯には補修痕がある。117は腐食が著しく形状は不明である。

V 調査のまとめ

今次の調査は県立高等学校産業教育施設整備事業(温室)に係る緊急発掘調査である。調査期間は平成5年8月23日から平成5年10月20日までの、延べ30日間である。発掘調査を行った総面積は1,080平方mである。本遺跡は昭和54年度に藤島川河川改修事業による緊急発掘調査から始まった。今回の調査は第6次の調査にあたる。

調査で検出された遺構は堀跡1条・井戸跡2基・溝跡6条・土壤多数の検出があった。SD 1堀跡は、第4次調査で内郭を区画する内堀の北西角確認、第5次調査では4次調査で確認された堀跡の南西角が確認され、一辺90mを測る内堀の存在が判明している。今次の調査では、A区での内堀西辺の中間で虎口となる外郭への通路跡、C区でも南辺虎口が検出された。また、C区では内郭を区画する土壙の基底部が確認されており、二重の土壙で囲まれた藤島城の規模が判明した。

出土遺物からは中国製の磁器類や、日本海側の陶器産地として存在した能登半島の珠洲焼系の陶器や、越前焼系の陶器、太平洋側の美濃瀬戸系の陶器が出土した。時期の検討からは、概ね15世紀中葉から16世紀中葉にかけて生産された陶磁器が主である。第1次から第5次までの調査が実施され、最低4期の遺構の時期的変遷が報告されている。豊富な内容を持った出土遺物等も含めて、庄内地方の中世城館跡や、中世社会の検討が今後の課題となる。

参考文献

山形県教育委員会 「藤島城跡第1次~第5次」発掘調査報告書 1979~1992

報告書抄録

ふりがな	ふじしまじょうあとだい6じはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	藤島城跡第6次発掘調査報告書					
副書名						
巻次						
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書					
シリーズ番号	第18集					
編集者名	野尻 侃・川田嘉信					
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター					
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 0236-72-5301					
発行月日	西暦 1994年3月31日					
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²
藤島城跡	山形県 東田川郡 藤島町大字 古橋跡 108-1	6423 1716	38度 46分 00秒	139度 54分 08秒	19930823～ 19931020	1,080 県立高等学 校産業教育 施設整備事 業(温室)
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項	
藤島城跡	城跡	南北朝～ 戦国時代	土 壇 掘立柱建物跡 井戸跡 溝 跡 堀 跡	51基 石製品(石臼、石鉢) 陶器(皿・壺・壺) 磁器(碗・皿) 染付(皿) 青磁(碗・皿) かわらけ・燈明皿	内郭堀跡が約90m四方に巡る。 内郭にも土塁が存在する事が判明し、 築城以前にも遺構が存在している。	

図 版



A 地区遺構検出状況(北から)



C 地区遺構検出状況(北から)

図版2



B地区遺構検出状況(北から)



B地区調査風景(南から)

図版3



SE 24井戸跡掘り方検出状況



SE 24井戸跡層序



SE 24井戸桿組検出状況

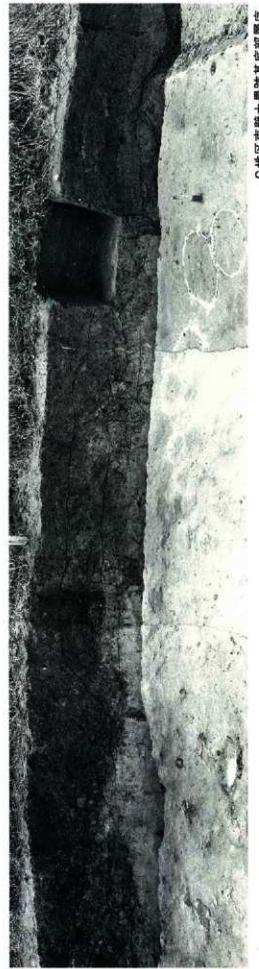
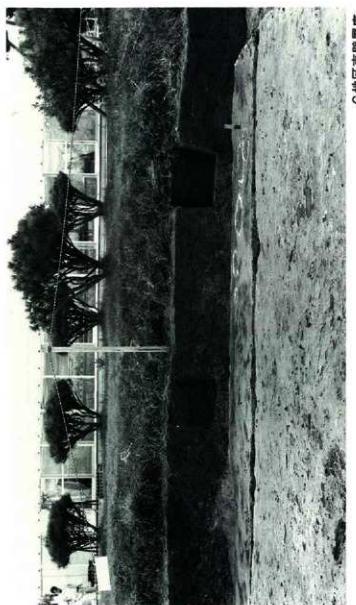


SE 24井戸跡出土木製品

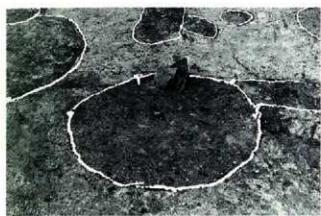


SE 24井戸跡完掘

图版 4



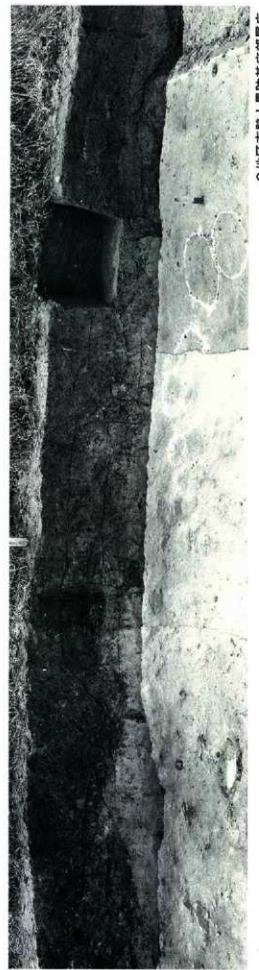
图版 5



図版 4

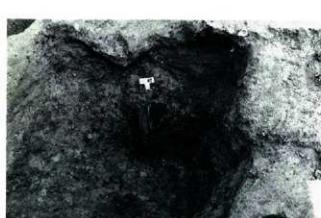
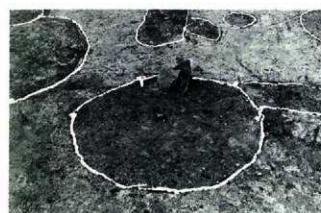


C地区某处基部墙体

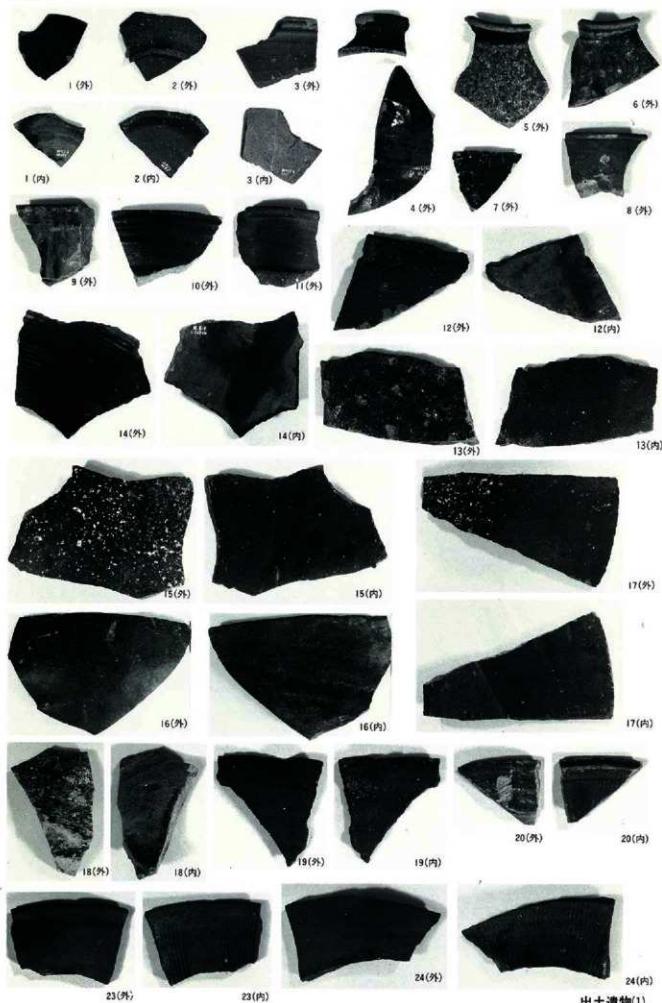


C地区某处基部墙体

図版 5

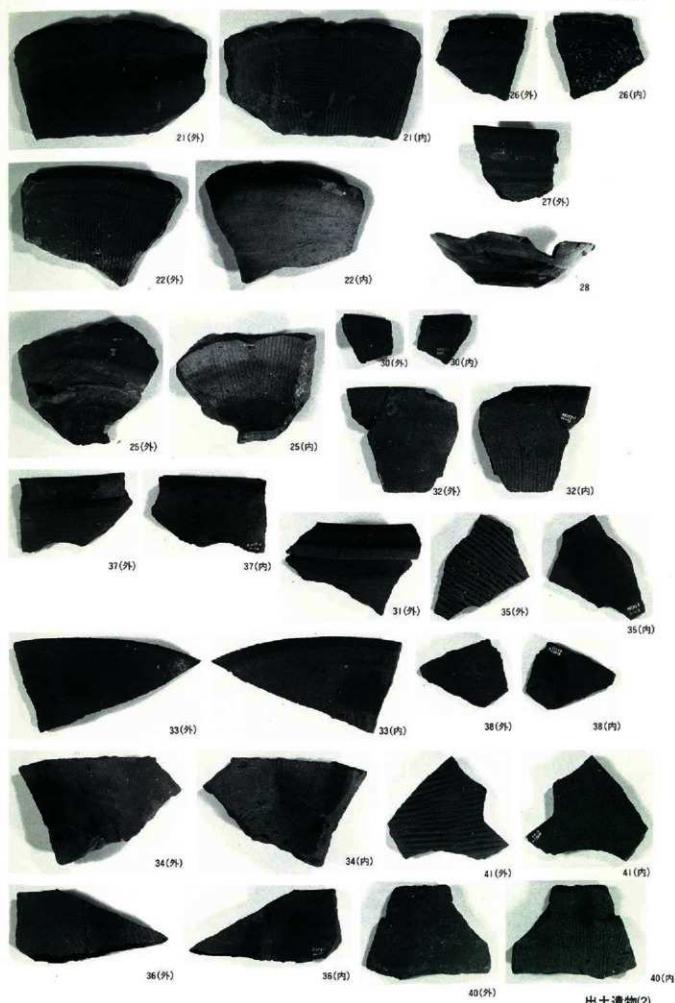


図版 6



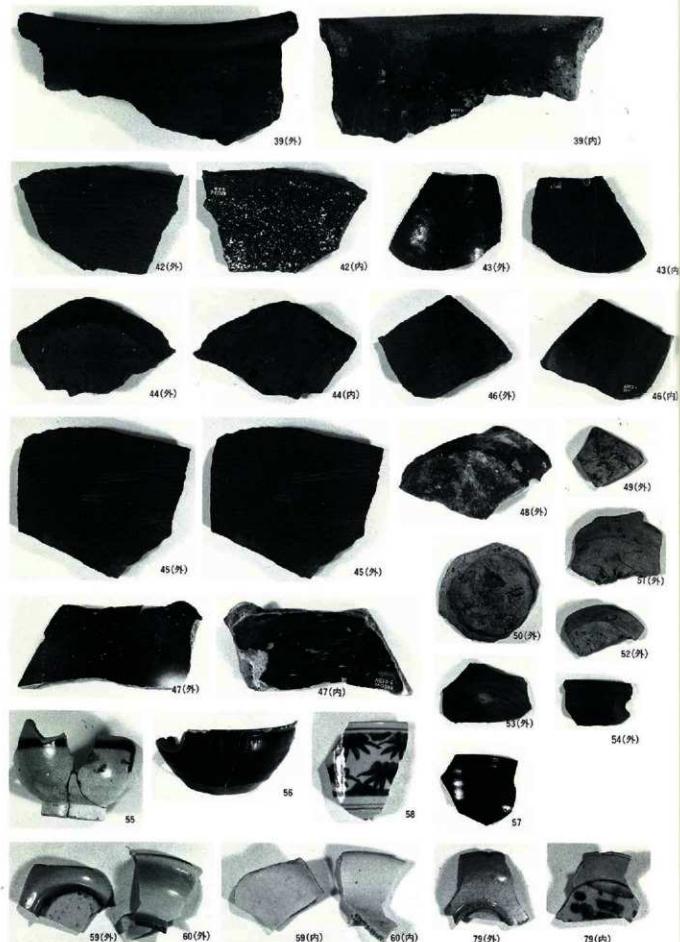
出土遺物(1)

図版 7



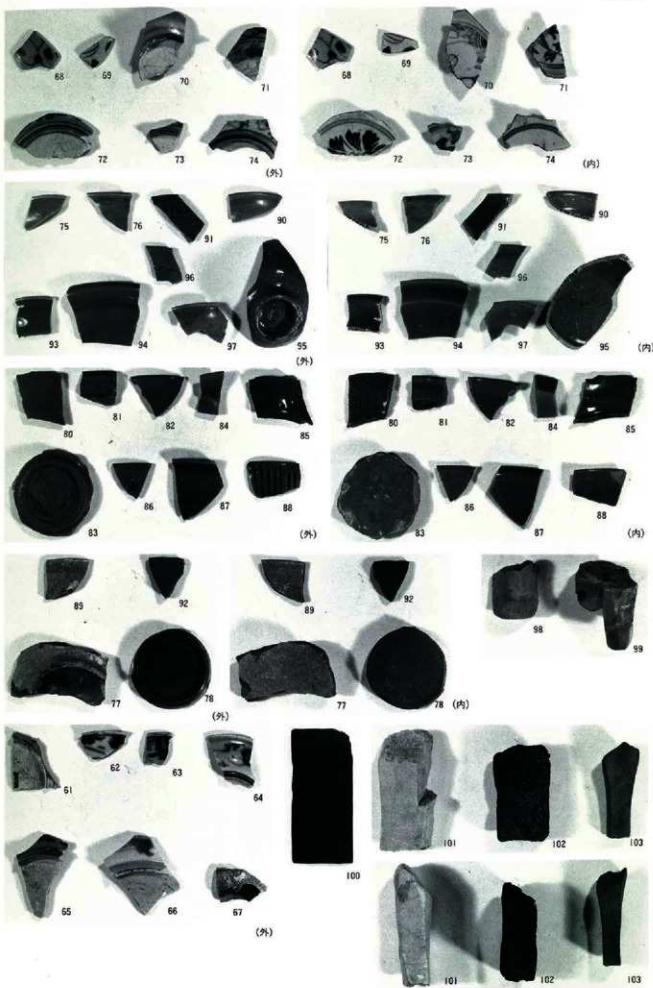
出土遺物(2)

図版8



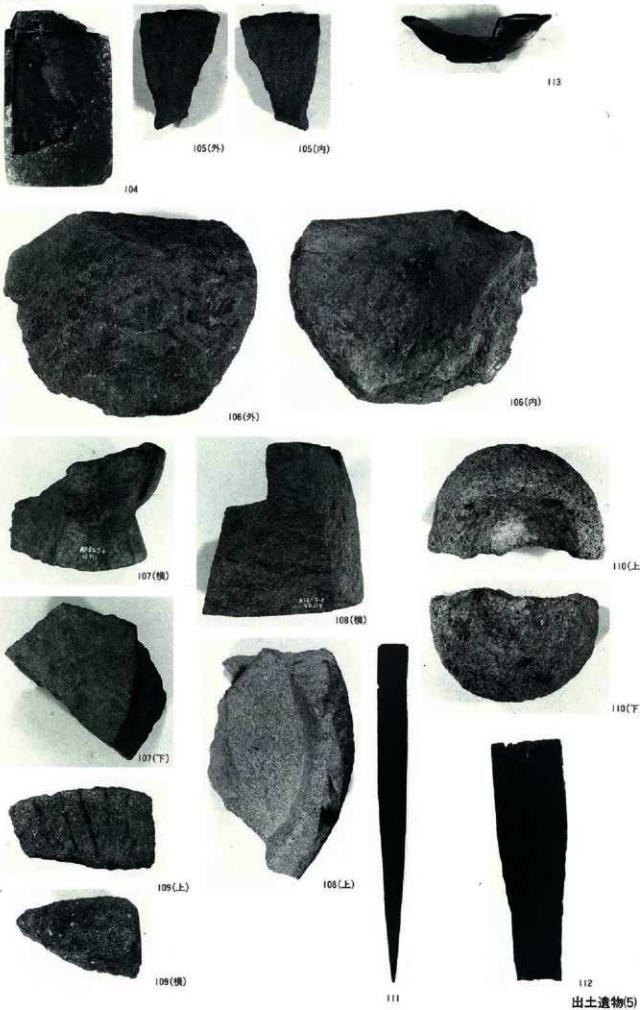
出土遺物(3)

図版9



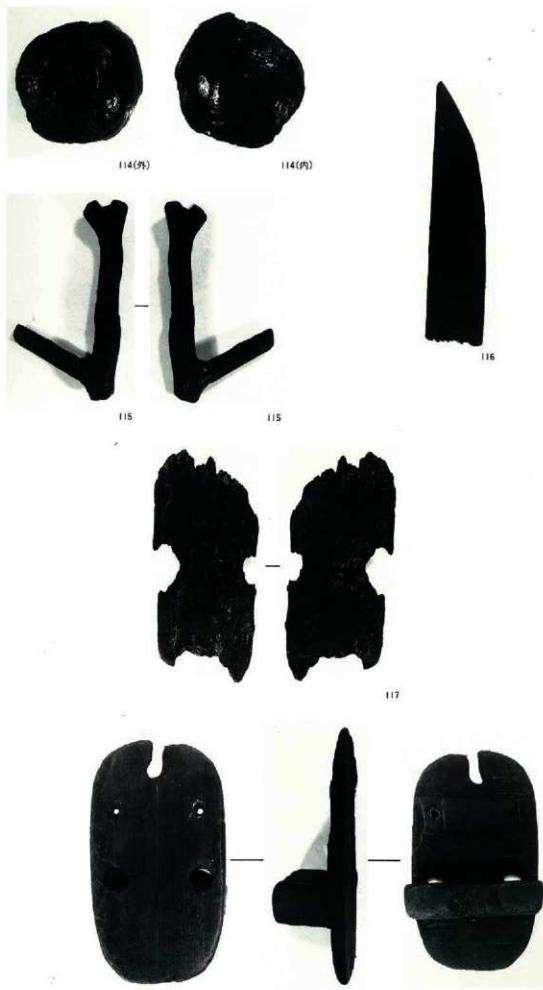
出土遺物(4)

図版10



出土遺物(5)

図版11



出土遺物(6)

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第18集

藤島城跡第6次発掘調査報告書

1994年3月31日 発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-31 山形県上山市弁天2丁目15番1号
電話 0236-72-5301
印刷 株式会社 田宮印刷所